

令和3年度瀬戸市総合教育会議 議事録

▽日 時

令和4年3月28日（月） 午前10時30分から午前11時30分まで

▽場 所

瀬戸市役所 北庁舎5階 全員協議会室

▽出席者（順不同、敬称略）

【瀬戸市総合教育会議構成員】

瀬戸市長 伊藤保徳

教育委員会教育長 横山彰

教育長職務代理者 中根志保

教育委員会委員 田中直美、小澤慎太郎、竹川典子、加藤千春

【事務局等】

副市長 青山一郎

経営戦略部 部長 水野典雄

政策推進課 課長 駒田一幸、課長補佐 久野 崇

教育部 部長 松崎太郎

教育政策課 課長 谷口 壘、課長補佐 吉川 僚

学校教育課 課長 此下明雄

▽議題

- (1) コミュニティ・スクールについて
- (2) 教育分野における交流連携について

▽議事内容

議事に先立ち、伊藤保徳市長から開会のあいさつがなされた。

- (1) コミュニティ・スクールについて
市長による会議進行のもと、事務局より資料の説明を行い、その後、意見交換を行った。意見については、以下のとおり。

委員

○今から3年ほど前になると思うが、小学校のPTA会長をしているときに、学校でコミュニティ・スクールについてよくお聞きした。その時に、他の学校のPTAの方と意見交換をさせていただいたが、隣の小学校では地域の連携が非常に強く、地域により差があると感じた。

- 自分の子ども時代は、地域の大人たちは、だいたい地域の子どものことを知っていたし、子どもたちも大人のことを知っていた。ただし、今はそういうことが非常に難しい状況になっている。
- コミュニティ・スクールは、PTA等の連携がうまくいっていない地域にとっては、非常にありがたい話である。PTA、それから地域の方が、独自で話し合いをしてくださいますかというの非常に難しいと思う。
- 私もPTAを経験したが、正直、親だけで子どもを見守っていくということに、非常に無理が生じていると感じた。共働き世帯が多いこともあり、子どもの登下校の時間に親が順番で付き添うことが非常に難しくなってきたということが、PTAを通じて感じた問題点であった。そういうことから、地域と連携した上で、うまく子どもたちを見守ることができれば一番良いと感じていた。
- 資料1について、「計画・実行・評価・改善」のPDCAサイクルを回し、より効果的な地域学校協働活動に向けた取り組みにつなげるとしているが、どんな理念でなぜ取り組むのかという最初のところがわかりにくい。なぜ取り組むのかについては、「人口が減っていく」「学校が減っていく」というネガティブな表現に対し、どんな効果があるのかについては、すごくポジティブな表現となっている。
- 背景として、人口が減る等の急速な社会の変化があるということが、コミュニティ・スクールに関わる方が前向きに取り組む理由となるのではと思う。

委員

- 児童委員という、立場から話をさせていただく。
- 0歳児から中学生までが見守り対象となっているが、他の委員も言われたように、現代社会では昔と違って本当に社会の流れとか、環境が大きく変わっている。社会も進化し、やはり人間関係は希薄になっていると思う。
- 色々な立場から子どもを見守り育てていくということは、言葉で言うのは簡単ではあるが、とても重大で難しい要素が沢山あると感じている。その中で、児童委員として何ができるかといえば、やはり子どもたちに関わるには登下校のボランティアが一番と思い、やれる範囲で子どもたちと学校と地域とのつながりを持たせていただいている。
- 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、地域の方々との話し合いとか交流とか、そういう機会も少なくなっているのは寂しいことだが、だからこそ、そういう状況から輪が広がっていくこともあると考える。
- それぞれの立場から、どういう場面で協力し子どもたちを見守っていくかということが、コミュニティ・スクールのような形でできたら素晴らしい

と思う。

教育長

- コミュニティ・スクールは、学校、家庭、地域が学校の教育目標、そして情報を共有し、能動的に自分たちのできる範囲で学校と協働しながら、子どもたちの成長を支えていく仕組みなので、広く様々な媒体を活用し、情報を発信していかなければならないと考える。
- また、学校それから子どもたちが一方的に支援を受けるだけでなく、コミュニティ・スクールの中で学校側からの情報提供と共に、地域貢献も必要である。
- 瀬戸市は、子ども・若者会議などで子どもたちの色々な意見を聞いている。明後日も、その子ども・若者会議が開催されるが、大人では思いつかないような発想や意見も出てくる。
- 子どもならではの発想で、学校から発信する地域貢献もしていかなければならないと考える。子どもたちも、まちづくりに参加する瀬戸市でありたいと考えているので、これからも市長部局の協力をお願いしたい。

市長

- 委員から発言があったように、もう少し肩の力を抜いて、やれることからやっていただくことも良いかと思う。
- 何のために取り組むのかという課題認識は、ぜひ子どもたちを通じて、あるいは学校を通じながら、地域でも考えていただきたい。
- 何か自分の役割をそこから見つけていただきたい。そういうことの集結が、一つの地域力というものになると考える。
- 子どもたちの社会活動そのものが地域の貢献につながるような、例えば街が綺麗になるとか、大きな声で挨拶をするとか、こういう地域貢献がコミュニティ・スクールの全容のような気がするので、委員の方々にはアドバイスを頂きながら、充実していきたいと思う。

(2) 教育分野における交流連携について

事務局より資料の説明を行い、その後、意見交換を行った。意見については、以下のとおり。

委員

- 瀬戸市と天草市は、歴史ややきもの以外の産業、そして地理的環境にも様々な差異があるので、互いに訪問団を派遣して生の体験による交流を図るこ

とができたら最善かと思うが、新型コロナウイルス感染症の現状においては、Webを通じた交流により、できるだけ多くの児童生徒にその体験をしてもらえることが良いと思う。

- 特に、互いにそれぞれの市の歴史や産業等の魅力を、Webを通じて紹介する過程で、まずは自分たちの市の魅力に自分たちがそれを再認識できるということが一番良いと思う。そして、調べる力や伝える力の向上、またウェブツールの活用能力の向上につなげることができればと思う。
- 天草市の魅力や情報を教えてもらう中で、異なる文化や異なる土地の歴史を勉強し、そして聞く力、理解する力の向上につなげることができればと思う。
- 現在は、Webや個人で色々なツールを通じて様々な世界の情報に接することはできるが、特に情報が多すぎるなど、情報が通り過ぎていってしまい、頭や心に残るものが限られているように思う。
- やはり子どもの頃に、少し面倒でも時間をかけて自分で調べ、そして自分で時間をかけて聞いたことについては、大人になっても頭にその体験としてよく残るのではないかと信じ、そのような交流ができればと思っている。
- ただし、個々の家庭の努力だけでは、いかんともできない色々な経済的事情によって、体験に差異が生じてはならない。
- 子どもによって、家庭によって、子どもが得られる体験に差異が生じることがあればこの差異を埋めること、そのお手伝いができればと思う。

委員

- 天草市と瀬戸市を結ぶ「民吉」と聞いて、自分が詳しく説明できるかと言われ心配になりインターネットで調べ再認識した。
- 子どもに「民吉」について聞いてみたところ、「名前は聞いたことがある」「教科書（副読本）に載っていた」「よく知らない」等、回答があったが、こういうきっかけで親子の会話にもつながったので、とても良かった。
- 教育は、押し付けても興味がない子は頭を通り越してしまうということもあるので、調べ学習をして、天草市とオンライン交流をし、ここで探究心を育てられると天草の子も瀬戸市の子も、お互い成長しても覚えていると思う。
- 「自立心」「主体性」「協調性」を育むためにはオンラインではなく、子どもたちが実際に体験することが大事だと思うので、子ども会とか地域の方を巻き込んで、まずは学校単位で段階的に、天草市の子どもたちと交流できると良い。
- 子どもたちが、両市の歴史や産業、文化に関心を持ち教養を育み、それが、すごく心温まる体験になる。

委員

- 瀬戸市と天草市が、子どもたちの交流事業をやるということは、自分の住む地域の歴史や文化の理解を深めることに役立ち、良いことだと思う。まずは瀬戸市と天草市の教育委員会や小中学生が、お互いの自分の地域を、これを機会に知識や認識を深めることが大切ではないか。
- 瀬戸市には、今でも伝統的なやきもの作りのところもあれば、あるいは最新のファインセラミックとかいうような、新しい産業も育っているので、そういうもの作りの現場を体験する機会をさらに増やしていくことが、大事ではないか。
- そのためには、商工会議所やあるいは関係団体、そういう方々の協力が不可欠だと思うが、協力をお願いするには、市長部局の方に間に入っていただきたい。
- 交流にあっては人数の面で、少数にとどまるざるを得ないと思うので、ぜひオンラインを活用し、幅広く交流するというのが良い。全国では、すでに交流連携に取り組んでいる自治体もあるので、そうした先進事例をよく研究してやっていただきたい。
- この交流事業により、学校現場の教員の負担の増加につながらないように、配慮していく必要を我々自身も考えていかなければならない。
- 先ほどの議題にもあったように、地域とのつながりを深めるということに取り組んでいかなければならない学校は、やらなければいけないことがすでに山積しており、その中で現場の教員の方々が、部活動なんかもそうだが、かなり負担を意識しているのではないかという懸念を私は持っている。
- 良いことばかりであっても、やはり、ある程度取捨選択というものも大事ではないか。

教育長

- 委員の皆さんが発言されたように、手法については、オンライン等で交流することが最も現実的であると考えます。また交流連携の議題は、皆さんが提案されたように、それぞれの町の強みや魅力を学び、そして体験し、その成果を紹介することになる。
- 小中学生らしい話題、例えば、人気のある給食のおかずを紹介したり、学校で流行っている遊びを紹介したり、例えば好きなジブリ作品などを紹介したりなど、はじめの一歩として始めても楽しい。
- また天草市では、こども陶芸展のような展示会もあるので、本市も連携して開催してはどうか。
- このような交流の方法や話題も子どもたちでコーディネートし、教員はそ

の調整役になる、こういうやり方で考えてはどうか。

- これらの取り組みが、他の委員の言われた「調べる」「伝える」「聞く」などの能力の向上、これと併せ、本市の教育目標である協働型課題解決能力の育成や、郷土愛の醸成につながると思う。

市長

- 委員が共通して発言されているが、まずは自分の地域のルーツや事情をしっかり知ることが結果として郷土愛を育むことにもなる。また、そのことが天草市と比較してどうなのかということを考えることも重要なポイントになる。
今後のアクションプランを進める上でも、留意していきたい。
- 今日のテーマの1つはコミュニティ・スクール、もう1つは交流連携というテーマで議論いただいたが、これは、教育アクションプランの中で重要な視点として示している。
- 小中一貫教育を瀬戸市は進めているが、その中で、能力を高めたいことが2つある。1つがコミュニティ・スクールという仕掛けの中で、「協働型課題解決能力」を高めたい、つまり地域の課題解決能力の向上である。
- 地域にどんな問題があるのか、あるいは、それは将来にわたりどうなのだろうということ、学校教育全般を通じて、あるいは地域の皆さんとの交流を通して、課題を見つけるポイントとか、課題を解決していく能力、知識とか、そういうことを子どもたちに学んで欲しい。
- もう1つは、「郷土愛の醸成」。「シビックプライド」だとか色々な言い方もあるが、間違いなく次代を担い、30年後、40年後には今の小中学校の生徒たちが、その時代の地域の主役になるわけで、その子どもたちが頑張ってもらうその礎は、やはり地域のある種のDNAであったり、あるいは環境であると思う。
- 今日は視点を変えて、テーマは「コミュニティ・スクール」と「交流連携」としましたが、言葉を変えてみれば、一方は「協働型課題解決能力の向上」であり、一方は「郷土愛を育む」ということと認識している。
- この2つを取り上げながら、総合的に意見がいただければと思う。

委員

- 総合教育会議の議題を2ついただいたが、「コミュニティ・スクール」については、長年の課題であったので、今年も議題に上がることに理解しやすかったが、「交流連携」については、どのようなことが考えられるかと少し考えていた時、市長の発言を聞き、なるほどそこに繋がるのだということ、を再認識した。

- 各委員からいただいた意見は、少しでも取り組んでいければと思うが、市立の教育であるので、華やかさであったり、ポジティブなところにどうしても目が行きがちですが、できる人できる家庭はできると思いますが、そこになるべく取りこぼしがないように平等な教育ができるよう、我々も注視していかなければいけないと思う。

委員

- やはり子どもの頃に見聞きしたものや教わったことというのは、今の自分を見てもそうですが、心のどこかにずっと残っていると思う。
- 郷土愛という話を意図したと発言されたが、やはり思うのは、この地域というものに育ててもらったという意識はあると思う。
- 自分の子どもに対しても、やはり地域ぐるみ、そして自分の子だけではなく周りの子たちも地域で見守っていくということが、非常に大事な時期になっていると、先ほどから各委員が発言されたように、どうしても地域の子どものつながりが弱くなっている中で、やはりみんなで子どもたちを見守っていこうという意識は、実は大人が意識改革を行うところの方が大事ではないかと思う。
- 微力ながら、尽力させていただければと思う。

委員

- 「郷土愛の醸成」について、自分の故郷を愛せよと言っても、なかなかそれは難しい。まず大人の役割として、子どもたちが誇りを持てるようなまちづくりをするということが、第一歩ではないか。
その上で、郷土の良さというものを子どもたちに伝える、あるいは子どもたち自身で調べるということが大事である。
- 例えば、今、全国で人口が減少している街はたくさんありますが、そういう街にも良さはあると思う。
瀬戸市は幸いにして地理的な条件等を考えたときに、比較的良い条件が揃っているのではないか。
- もちろん課題もたくさんあるかと思うが、まず子どもたちに自分のふるさと瀬戸を愛してもらうために、大人として、我々で言えば行政とか、教育行政に携わる立場の人間が、何をしなければならぬか考えるべき。
常に考えながら政策を進めるということは大事である。

委員

- 昔は、祭りは様々なことに根付き、その歴史なども知らず知らずのうちに教えてもらっていたということを思い起こした。

- そういう自然体で、例えば祭りにはこういう意図があるという、子どもたちへの伝承みたいなものがより必要かと思う。そういうところから、みんな繋がっているということを思い出しながら聞いていた。
- 瀬戸から名古屋に出て行くのに、それほど距離は遠くない、市内に自然はまだ沢山残っている。この会議に出席し、ますます瀬戸が好きになった。

委員

- 親を巻き込んで子どもたちと一緒にやれると、親も「そうか瀬戸はこういうところがあったんだ」と気づき、子どもたちにも伝わると思う。
- 地域によって様々な問題があり、同じ問題ばかりではない。子どもを見守るというのは、家族だけではなく、おじいちゃん、おばあちゃんから、今社会に出ている若い20代30代の若者たちも、瀬戸市の子どもたちを見てくれている。そんな都市になっていくと、もっともっと、良いまちになると思う。

教育長

- 子どもの見守りや教育というのは、子どもたちに良かれと思って、一方的に大人たちがお膳立てしている。こういうことではなく、子どもたちの意見を十分聞きながら、子どもたちの主体性や可能性というのを尊重し、今後も進めていかなければならない。

市長

- 委員の皆様には、長時間にわたり活発なご意見をいただき、感謝申し上げます。話し合うことというのは、学びに通じ、一方では反省でもあり、あるいは発見でもあると、このように思わせていただいた。
- 皆様それぞれの立場で、大変特徴のある発言をいただいたことに、心から感謝を申し上げ、教育総合会議を閉会とする。

以上